



始

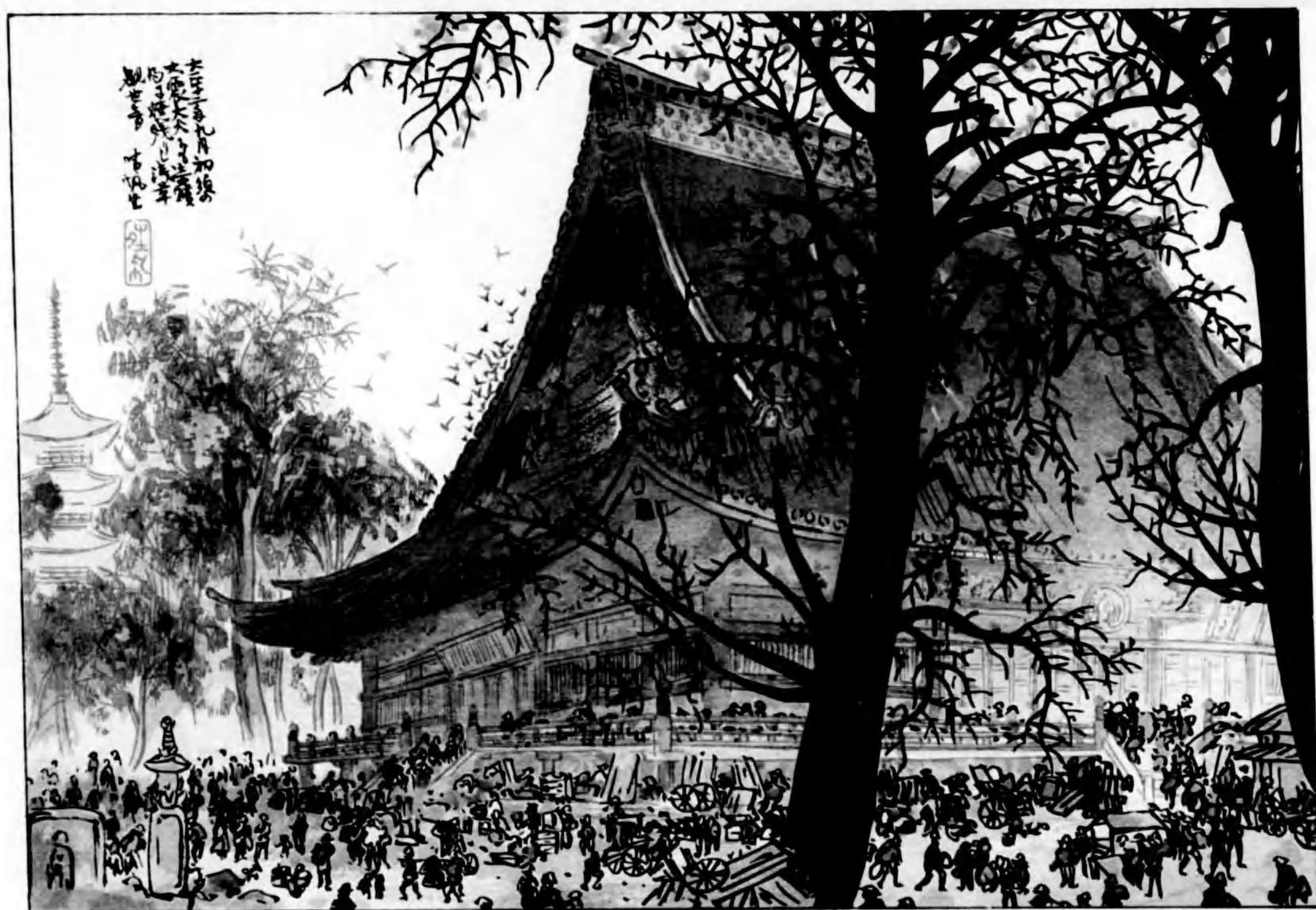


木版
包摺

大正大震大畫譜

第一集

大正
12.28
印



大正十一年
三月廿一日
上海
...





品川行
日本橋白木屋町
東金馬車



陸軍歩 二等卒中村福三郎君

青原公園の池の邊に、故陸軍歩兵二等卒中村福三郎遺死之地と記された太い樫柱が立てられ、その裏には一層の恨みを盡くせしむる哀れな句が認められて居る。樫柱の前には香煙絶ゆることなく、救ひの神として崇拜の者袖をぬらさぬはない。中村氏は歩兵第三聯隊第九中隊に屬し、慰勞休養を得て隊から歸つて居た。偶々大正十二年九月一日の大震災に會ひ不幸にも家屋倒潰し、家族四人この下敷となつた。丁度附近に外出して居た中村二等卒は驚いて飛んで歸り一家の者を助けた。そうして更に主人を氣遣ひ馳せてその安否を見届け吉原の池の邊までもどつて来たが既に火災が四方に起つて猛火につつまれ今や如何ともすべからざる悲況に陥つた。戸板夜具などで頭を被ふて、漸く避難して来た群衆は、後から押され、池中に陥り溺死するものが數へきれない。少歳に襲はれて抱ける我子を池の中に投ずるもある。忽ち焦熱地獄の一大修羅場と化してしまつた。この時勇敢なる中村氏は、勇猛邁進して、池中に投ぜられた小供を助け、或は避難民の頭の上から水を注ぎ、目覺ましい活動をなし、藤棚の上に登り、群衆に避難の方向を指示した。これが始めに通れ路を得て、幾干の人々が命を全うすることが出来た。平常から率心の強い二等卒は、母や兄がこの池の附近に避難して来たとも知らず、母や家を氣遣つて、もとの道にかへらんとしたが、既に時機を失し、遂に猛火を脱することが出来ず、池の邊の消火栓の附近で、無様な死を遂げた。中村氏は淺草常盤座の藝師で、家が貧困であつたので、軍事救護を受けて居た。資性温良、一身を犠牲として、群衆を助けたことは、實に人の龜鑑とするに足るのである。記念の樫柱も、壯烈な句も、これ實に氏の爲めに助けられた人の報恩の心で建てたものであろう。香煙の絶え間ないのは、如何に多くの人々が助けられたかをよく物語るものである。



終

